発達理論の学び舎

Back Number: Vol 296

Website:「発達理論の学び舎」

No.597 小雨の伝言_A Message of a Drizzle

© YOHEI KATO 2020

目次

5901. 土曜日の静かな朝に

5902. 近未来的な感覚と愛する対象がやってくる予感

5903. 映画鑑賞を通じた治癒と変容をもたらすムービーヨガの実践

5904. アテネ旅行に関する予感:今朝方の夢

5905. 今朝方の夢を思い出して:小咄のような曲を作ること

5906. 大学のキャンパスと授業に関する今朝方の夢

5907.「一瞬一生の会」の第2回のクラスを終えて

5908. 今朝方の夢

5909. 夏の旅行計画の変更と今朝方の夢の続き

5910. 力の時代から愛の時代へ

5911. 今朝方の夢

5912. フローニンゲンの画集専門店にて

5913.「自然法爾」の在り方と今朝方の夢

5914. 本日の振り返り

5915. 親族の葬式に関する夢

5916. 真夏のアテネに向けて

5917. アテネ旅行と秋の講演会に向けて

5918. 今朝方の夢

5919. 本日の振り返り:成長の方向性

5920. 真善美と今朝方の夢

5901. 土曜日の静かな朝に

時刻は午前5時半を迎えた。辺りはもうすっかりと明るくなっている。優しいそよ風が、新緑の木々の葉を揺らしている。空にはうっすらとした雲がかかっていて、まだ朝日を拝むことはできない。今の空の雰囲気からは想像しにくいが、今日は昼過ぎから雷を伴う雨が降るそうだ。

今日は創作活動に並行して、来週月曜日の「一瞬一生の会」の第2回目のクラスで取り上げる事前課題を私も取り組んでおこうと思う。第2回では、映画『十二人の怒れる男』を取り上げる。今日は時間を取って、それを見たいと思う。

昨日は随分と音声ファイルを作成した。会に参加してくださっている皆さんのリフレクションジャーナルが大変充実しており、ジャーナルに対してコメントする音声ファイルの作成が追いつけていないほどだ。上記の映画に加えて、今日か明日には再度音声ファイルを作っていきたいと思う。再来週の予定となるが、再来週の始めに大切な打ち合わせがあり、それに向けた準備もゆっくりと進めていこう。

今朝方は、自分の無意識は少し落ち着いていたように思う。あまり印象に残る夢を見ていなかった。それでもあえて夢を思い出してみよう。思い出せるものとしては、小中高時代の親友(SI)が現れ、彼と何かについて楽しげに話していたことは記憶に残っている。また、自分がどこか見慣れないような場所にいた感覚も残っている。そこは明らかに日本ではなかった。

2羽の鳥たちが戯れ合いながら遠くの方へ飛んでいった。先ほどまで吹いていたそよ風が止み、今は無風の状態が続いている。

今日はどのような日になるだろうか。今日もまた、充実感と幸福感の伴う1日になるに違いない。そんな確信を持って、今日の取り組みに従事していこう。フローニンゲン:2020/6/13(土)05:58

5902. 近未来的な感覚と愛する対象がやってくる予感

時刻は午後3時半を迎えた。天気予報に変化があり、今はまだ雷が伴う雨が降っていない。むしろ、土曜日の穏やかな午後の世界が存分に広がっている。

つい先ほどまで、書斎の窓辺に行って、そこで日光浴をしながら読書をしていた。ふと視線を下にやり、隣の家の庭を見ると、ニコさんがパラソルの下で空を見上げながらうたた寝をしていた。とても気持ち良さそうな顔をしていて、そこにあるのは平穏さだった。

今日は午前中にドビュッシーの曲を参考にして曲を作っていると、近未来な感覚が芽生えた。その曲を聴きながら、自分の意識がどこか未来の世界に飛んでいき、その世界の中に浸っている自己がいたのである。曲は時間感覚までも変容させるようだ。そして、音楽世界の中では、今いる場所とは全く違う場所に存在を転置させることができるようなのだ。それはとても興味深い体験であった。

午前中にはその他に、博士論文についてまた少し考えていた。欧米の大学院で博士号を取得するというのは、その研究対象について自分が最も精通していることを意味する。そうした研究に乗り出していくためには、研究対象に対する深い愛が必要となる。

今の自分は、愛する対象を見つけようとしているというよりも、愛する対象が向こうからやってくるのを待っている状態なのだ。何かの縁でそれが運ばれてきた時こそ、博士論文を書き始めるタイミングなのだろう。そうした時期が近々やってくるかもしれない。そんな予感を持ちながら、自分にできることは待つことである。それは消極的な形ではなく、極めて能動的かつ積極的な待つという行為なのだ。

愛する対象が向こうからやってきて、それを愛する愛の力によって論文を執筆していくこと。そうした機会がこの人生にやってきたらどれほど素敵なことだろうか。そしてそれは、どれほど幸運なことだろうか。縁と運に恵まれた自分の人生のことを思うと、そうした幸運な事柄が運ばれてくるような気がしている。その時には、感謝の念を持ってその幸運を受け取ろう。そしてそれを自分にできる方法で形にし、この世界に何かを共有する形で世界に関与していく。フローニンゲン：2020/6/13（土）15:53

5903. 映画鑑賞を通じた治癒と変容をもたらすムービーヨガの実践

時刻は午後8時を迎えようとしている。空はまだ穏やかであり、天気予報を裏切る形で、雷の伴う雨はまだ降っていない。雷を伴う雨はそれとして情緒があり、自然の力強さを感じさせてくれるため、私は意外と雷を眺めることが好きなのだと改めて思う。

今日は、来週月曜日に迫った「一瞬一生の会」の第2回のクラスの事前課題である『十二人の怒れる男』という映画を見た。昨年にも同じ映画を見たのだが、今回はまた違う印象や気づきを受けたことが興味深い。それを見て、自分自身がこの1年間の間に確かに変化を遂げたのだということを知った。

映画そのものに対して発達理論の観点からあれこれと考えを巡らせていただけではなく、映画を見ている最中の自分にも気づきの意識を当てながら、自分の心の状態がどのように変化していくのかを観察していた。これはまさに、私がジョン･エフ･ケネディ大学時代に出会った「ムービーヨガ」という実践である。これはJFKU時代の友人のジョナサンが教えてくれた実践技法であり、映画を見ているプロセスにおける自己の心のあり様を観察し、それによって治癒と変容を実現する方法である。先ほど映画を見ている時にも、まさにこの実践を行っていて、この実践方法について音声ファイルでも簡単に皆さんに紹介しておいた。第2回のクラスの中で、この映画に対する皆さんの気づきや発見事項について話を聞けることが楽しみである。おそらく、私が気づけていなかったようなことに気づいた方も多くいることだろう。

今日もまた、一瞬一生の会の皆さんのリフレクションジャーナルを読み進めていた。皆さん本当に毎日熱心にジャーナルの執筆を続けておられる。その姿には大変感銘を受ける。皆さんのジャーナルを読むことによって、自分の知識と経験もより豊かなものになってきていることを実感している。自分の知見が拡張し、より密なものになっていることを実感しているのだ。これは嬉しい変化であり、こうした変化があるからこそ、他者との協働学習はやめられないのだ。改めて、素晴らしい学習コミュニティーの中で学びを深めることができていることを有り難く思った1日だった。フローニンゲン:2020/6/13(土)20:04

5904. アテネ旅行に関する予感:今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。日曜日の静かな朝がやってきた。天気予報が外れたのか、昨夜は雷を伴う雨が降っていなかったようだ。起床してすぐに、寝室の窓から外を眺めたところ、道路が雨で濡れていなかったことからそのように判断した。今は空が灰色の雲に覆われているが、雨は降っていない。予報では、昼過ぎから雨が降るようだ。今の空の様子からすると、雲の色が確かに雨をもたらすような感じを持っているので、今日は予報が当たりそうだ。

明日からは6月も折り返しとなる。1日が過ぎ去るのは本当に早く、淡々と月日が進行していき、同時に自分の内側に淡々と何かが蓄積されていくのがわかる。そしてその蓄積は、自分に変容をもたらしている。

気がつけば6月も半ばとなり、昨日は、前回旅行をした日からアテネ旅行までの期間について考えていた。前回の旅行は、なんと年末年始のマルタ共和国とミラノに行った旅行だったので、あれから半年近く期間が空いていることに驚く。

欧州で生活を始めて以降、少なくとも3ヶ月に1回は旅行に出かけ、フローニンゲン大学を離れてからは、1ヶ月半に1回ぐらいのペースで旅行していた。それを考えると、今回コロナの件で旅行がこれほどまでに延期されてしまったことは、それもまた自分にとって新しい体験だった。来月末に予定しているアテネ旅行が実現されるとき、これまで旅行に出かけることができなかった分、何かが自分の内側に流れ込んでくるような予感がしている。そしてそれは、自分の内側の何かを大きく開いてくれるかもしれない。

何が流れ込んできて、内側の何が開くのか。そのあたりは旅に出かけてみないとわからないことなのだが、この半年間に積み重ねてきたものがある臨界点を迎え、そこから自分にフィードバックされる形で何かしらの変化を旅の最中で感じるだろう。そうしたことも今回の旅の楽しみの1つである。

今朝方も夢を見ていたのだが、改めてそれを思い出そうとしてみると、なかなか難しい。日本のどこかの街、いや欧州の雰囲気も感じることができたので、日本だと断定することは難しいが、どこかの地方都市にいたことは確かだ。そこで友人の誰かと話をしていたのを覚えている。そこでなされていた話は、笑い話でもなく、真剣な話でもなく、どこか中立的な感覚を持った話だったように思う。今朝方の夢で覚えているのはそれぐらいだろうか。

何か1つ重要なシーンがあったように感じているのだが、それは感覚に留まり、具体的な情景描写の形を取っていない。具体的な情景描写があれば、それを絵にすることも言葉にすることもできる。だが具体的な情景描写がない場合、それらの手段では形にできない。一方で、仮に具体的な情景描写がなくても、感覚さえあれば音楽としての形にできることは注目に値する。今日もまた、自分の内側の感覚を言葉･絵･音として表現していこう。フローニンゲン：2020/6/14（日）06:15

© YOHEI KATO 2020

5905. 今朝方の夢を思い出して：小咄のような曲を作ること

時刻は午後7時を迎えた。ちょうど今し方、夕食を摂り終えた。今日は朝から曇りがちな1日であり、昼過ぎには天気予報の通り、激しい雨が降った。ところが、そこからは天気予報が外れ、雨は止み、今も穏やかな状態が続いている。どうやら雨の降る時間帯が後ろにずれ込み、本日の深夜から明日の朝にかけて雨が降るようだ。

今朝はあまり夢を覚えていなかったのだが、午後にふと、夢の断片を思い出した。夢の中で私は、何らかの理由で朝食を食べないといけない状況にいた。場所はホテルのレストランであり、朝食の質は良さそうだったが、普段朝食を摂らない私にとってみれば、それらの食事はほとんど魅力的に映らなかった。どういうわけか朝食を摂るような強制力が自分に働いていて、それに抗うことが難しかった。とは言え、やはり朝食を食べたくはなかったので、果物だけいただくことにした。そのような内容の夢だった。

そこから午後に仮眠を取っていると、あるビジョンを見た。それは、家の目の前の通りが浸水しているビジョンだった。そして実際に目覚めてみると、激しい雨が降り始めていて、道に水溜りができ始めていた。

雨音が仮眠中の意識に影響を与えたのか、それとも何か別の作用が働いていたのかわからないが、いずれにせよ、外面世界で雨が降っていることが、目を閉じた状態の内面世界に影響を与えていたことは興味深い。そう言えば、先日は起床直後に同様の夢を見ていて、目覚めていると、実際に雨が降っていることがあった。外側の世界とシンクロする何かが自分の中にあるようだ。

今日をもって1つの週が終わりを迎え、明日からはまた新しい週となる。明日は、「一瞬一生の会」の第2回目のクラスがある。それに向けて準備は済んでいるので、明日はクラスが始まるまでの時間を、いつものように創作活動に充てたいと思う。

本日作曲実践をしていると、改めて、小咄のような短い曲を作っていこうと思った。このアイデアは、今日もまたいくつか音声ファイルを作成していた時に芽生えたものだ。自分がまるで話をしているかのような曲を形にしていくことへの関心。曲という表現物は、自分が伝えたいと思う小咄のようなも

のにしていこう。明日からは、そうした意識で作曲実践に取り組もうと思う。フローニンゲン：2020/6/14（日）19:21

5906. 大学のキャンパスと授業に関する今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今、小鳥たちが元気の良い鳴き声を上げている。

先ほどまで雨が降っていたが、今は雨が止み、薄い雨雲が見えながらも、世界は落ち着いている。午前中はまだ雨が降るようだが、午後からは回復の方向に向かう。6月の半ばを迎えたが、例年通り、フローニンゲンはまだまだ肌寒い。いや、今はもう肌寒いというよりも涼しいと述べた方がいいかもしれない。一般的には季節はもう夏なのだから。

今日から新たな週を迎えた。今日は、「一瞬一生の会」の第2回のクラスが昼前にある。2時間ほどのクラスが今から楽しみである。すでに準備はしてあるので、クラスの開始までは創作活動に打ち込んでいこう。今日も創意工夫と楽しむ精神を持って、集中した状態で創作活動に従事する。

ここ数日は、印象に残る夢をあまり見ていなかった。一方、今朝方は少し記憶に残る夢を見ていた。夢の中で私は、ある日本の有名私立大学のキャンパスにいた。キャンパス内のベンチに腰掛けて、2人の見知らぬ男女と話をしていた。彼らと話をしていたのは、創造性に関するものであり、この大学の創造性はどれくらいなのかを、キャンパスや授業の革新性の観点から意見交換をしていた。

2人はこの大学の大学院に通っているらしく、大学愛もあってか、その大学の創造性を高く評価しているようであった。だが私は、発達科学や教育科学を学んできた経験から、彼らにはない観点でこの大学の創造性について意見を述べた。すると2人は、これまでにはない観点に触れたような驚きの表情を浮かべており、私の話を真剣に聞いていた。その後、2人から、では自分はどの大学のキャンパスと授業が創造性に溢れているのかを問われたので、自分が良いなと思う大学についていくつか紹介した。その中には、アメリカの大学がいくつか入っていて、自然の中にある広大なキャンパスと、双方向的な授業の様子について紹介をした。双方向的な授業そのものは特に目ぼしいものではないと言及し、それでもその大学で行われている授業の進め方のユニークさを紹介した。そこで夢の場面が変わった。

今朝方はその他にも夢を見ていたように思う。深夜に1度目が覚めることがあって、その直前にも夢を見ていた。目覚めた時には、私は寝ぼけていて、布団の上に何かあり得ないものが置かれているように錯覚していたのを覚えている。フローニンゲン:2020/6/15(月)05:43

5907.「一瞬一生の会」の第2回のクラスを終えて

時刻は午後7時を迎えた。穏やかな夕方のこの時間に、今日1日を静かにそっと振り返りたい。それは些細なことであっても構わない。むしろそうした些細なことの中に、そしてそれを綴ることの中に自己とこの人生が存在しているように思う。

何気ない些細なこと。そうしたちょっとした小さなことの中に自分の全存在が、この人生の全てが内包されている。自己と人生は、そうした細部の中に絶えず宿っているのだ。

今日はオランダ時間の昼前に、「一瞬一生の会」の第2回のクラスがあった。今日のクラスの中で交わされたディスカッションには大いに刺激されるものがあり、クラスが終わった後もあれこれと考え事をしていた。そしてそのうちのいくつかを音声ファイルの形で受講生の皆さんに共有していた。他者と共に学ぶことの大きな意義を実感する1日だった。

今日はこれから、少なくとももう1つ音声ファイルを作成し、あと一曲ほど曲の原型モデルを作る。その後、返信が必要なメールに返信する。また、明日の夜に告知をしたいことがあるので、そのメールのドラフトを作成しておきたい。それが終われば、今日の仕事は完了であり、あとは就寝までの時間を気ままに絵を描いて過ごしたいと思う。

毎日が落ち着きと充実さの中で過ぎていく。そこには幸福感が詰まっていて、日々をそのように生きることは感謝の念を捧げる対象になった。

昨日、ギリシャの航空会社から連絡があり、幸いにも、ギリシャの空港が稼働し始めたようだ。6/15から6/30までは段階的にフライトの本数を増やしていくそうであり、この分だと、7月末のアテネ旅行はもう実現すると見ていいだろう。オランダはヨーロッパの中でも感染者が多い国だったので、イタリアやドイツと同じカテゴリーに分けられており、6/30までの期間は、アテネの国際空港に到着すると、それらの国から来た人は100%検査の対象となるようだった。別のカテゴリーの国から来た人は、

ランダムの抜き打ち検査が空港で行われるという連絡があった。こうした検査も、私がアテネに行く頃には無くなっているだろう。

久しぶりの旅行に期待感が徐々に高まっていく。前回の旅行から半年ほどが経つので、旅行に出かける感動もまたひとしおだろう。アテネでどれほどの体験をして、それを咀嚼･吸収するのにどれだけ時間がかかるのか定かではない。アテネから戻ってきて、体験の咀嚼と吸収にそれほど負荷がなければ、10月の中旬に一時帰国する前に、9月の中旬あたりにスイスのアスコナやドルナッハに足を運ぶことも検討しよう。フローニンゲン：2020/6/15（月）19:26

5908. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今、朝のゆったりとした時間を味わっている。

小鳥たちが一斉に小枝から飛び立ち、元気一杯の鳴き声を上げて空に向かっていった。私の気持ちも高まり、まるで自分も元気一杯に空に飛び出していくかのような感覚があった。

絶え間ざる出発。私もまた彼らと同じように、絶えず出発をする存在なのだ。今日という新しい1日が始まったことにより、また自分の中で新たな出発がなされたのである。人生とは本当に出発の連続だ。

今朝は風もなく、辺りがとても落ち着いている。昨日は少々雨が降る時間帯もあったが、今日は雨は降らないようだ。

窓の外の景色をぼんやりと眺めながら、今朝方の夢について思い出している。夢の中で私は、日本の旅館のような場所にいた。そこは高すぎもせず、安すぎもせず、良心的な値段の旅館の雰囲気を発していた。旅館の中の畳部屋で、私は友人たち数名と話をしていた。話の中で、昔活躍していた女子アナウンサーが結婚して、日本ではない国で悠々自適に生活していると聞いた。

すると不思議なことに、その女子アナウンサーがその場に現れて、私はその方と知り合いだったらしく、お互いの近況報告をして、少しばかり一緒に散歩することになった。旅館の外に出て、どこに行くでもなく、ブラブラと辺りを散歩しながら、その方の話を伺っていた。話をしている最中のその方の

表情は明るく、結婚生活が充実していることを知って何よりだと思った。そのような夢の場面があった。

また別の場面として、自分が言ったことか、あるいは誰か友人が言ったことに対してか、大笑いする場面があったことを覚えている。それは本当に腹を抱えてしまうほど面白いことであり、あまりに笑いすぎたので、そこで1度目を覚ましてしまうことがあった。今朝方の夢は、総じて幸福感をもたらすようなものだったように思う。

昨夜は、絵を描く時間がなかった。絵を描く代わりに、「一瞬一生の会」の補助音声ファイルを作っていた。会が始まってまだ1ヶ月ほどしか経っていないのだが、すでに音声ファイルの総数は87となり、時間で言えば、1839分となった。およそ30時間半ほどパソコン越しに1人で様々なことについて話をしている計算になる。

昨日のクラスは自分にとっても刺激をもたらすものだったのか、クラスが終わってから、かなりの量の音声ファイルを作っていた。一夜明け、今日は少しそうした衝動が落ち着いているようであり、今日は音声ファイルを作ることはせず、創作活動と読書に力を入れていこうと思う。今日もまた、小さな前進を遂げていく日となる。フローニンゲン:2020/6/16(火)06:23

5909. 夏の旅行計画の変更と今朝方の夢の続き

つい今し方夕食を摂り終えた。穏やかな夕日が夕暮れ空に浮かんでいる。

本日の夕方に、1つ残念な知らせがあった。二転三転しているような状況なのだが、またしてもアテネ行きのフライトのキャンセルの連絡があった。おそらく今回で4回目のキャンセルの連絡である。数日前に、アテネの空港が稼働し始めたという連絡を受けて喜んでいたのだが、やはりまだフライトを段階的に増やしている最中のようであり、私がアテネに行く便はキャンセルになってしまったのとことだった。これを受けて、さらに1ヶ月後に伸ばすのではなく、さらに先に伸ばし、アテネには9月の中旬あたりに行こうと思う。アテネの年間の天気を確認すると、7月と8月はかなり気温が上がるようであるから、8月は避けて、少し涼しくなった9月に行くのが賢明かと思った。

近日中にフライトの変更をして、再度ホテルにも連絡をしておこう。アテネ旅行が延期になったことに伴い、スイスのアスコナやドルナッハに行くのは来年にしようかと思う。その代わりにこの夏は、オランダ国内の旅行を計画しようと思う。それは日帰りでもいいし、一泊してもいいだろう。

今のところ、ピエト･モンドリアンの美術館には足を運んでみようと思っている。美術館近くの街に一泊して、ゆっくり美術館に足を運ぼうか。その他にも、オランダでまだ訪れたことのない街に行ってみるのもいいかもしれない。例えば、アイントホーフェンなどは気になる街だ。あとは列車がどれくらい運行しているのかによるが、この際に、隣国のベルギーに足を運んでみるのも悪くない。近日中に列車の運行状況を確認してみよう。

午後にふと、今朝方の夢の続きを思い出した。それを今書き留めておこうと思う。

夢の中で私は、見慣れない国の高速道路近くのファーストフード店に行き、そこでバスの運転手のために飲み物や食べ物を購入しようとしていた。私はどうやらバスでそこまで行ったらしく、バスの乗客のもう1人の男性のためにも飲み物や食べ物を購入しようとしていた。

店に到着すると、自分は特に何も必要としてなかったが、コーヒーぐらい購入しようかと考えを改めた。その店のコーヒーの質はあまり良いものではないと知りながらも、何か飲み物が欲しかったことは確かである。

レジに到着すると、もうすぐ店が閉店すると店員が述べ、私は急いで2人のための食べ物と飲み物を購入しようとしたが、バスの運転手があまりにも多くの注文をしたので（うどんや蕎麦を5種類ぐらいのつゆに分けて私に注文してきた）、注文を忘れてしまっていた。そのため、バスに戻って聞きに帰った。そして再び店に戻ると、もう店内は薄暗くなっており、片付けをし始めている店員曰く、店には食べ物が残っていないとのことだった。仕方なく私は自分のコーヒーだけを注文した。

レジのそばには、持ち帰り用の食べ物が売られているコーナーがあり、そこでは魚の刺身が売られていた。そのそばに、無料で持ち帰れる小さなパックに詰められた醤油があることに気づき、私は2人にそれを持って帰ることにした。バスに戻ると、運転手と男性は消えていて、車内には誰もいなかった。バスの窓から反対側の通りを見ると、そこには立派な旅館があった。見ると、ある高校の名

前が書かれた看板が立てかけてあって、OB·OG会が開かれるとのことだった。すると、続々とその旅館に人がやってきて、今から盛大に会が開催されるようだった。

私はその高校の卒業生ではないのだが、バスに近づいてきた見知らぬ男性に声を掛けられ、食事だけどうかと誘われた。何やら、豪華な日本食が食べられるとのことだった。久しぶりに和食が食べたいと思ったが、私は人混みが好きではないので、その誘いを断り、バスに乗って帰ることにした。そのような夢の場面があったことを覚えている。

午後の時間帯に目を閉じてバランスボールに乗って背中をほぐしてリラックスしていると、鮮明なビジョンとして朝の夢が再び思い出されたことは不思議な体験であった。今後も、朝方の夢を忘れていたら、そのような形で思い出すようにしてみようかと思う。フローニンゲン：2020/6/16（火）19:21

5910. 力の時代から愛の時代へ

爽やかなそよ風が辺りをゆっくりと歩いている。そよ風の気持ちは穏やかであり、そよ風に揺れる木々も穏やかだ。

平穏さに包まれた朝の世界。近くからいつもとは少し違う小鳥の鳴き声が聞こえてきた。それは力強く朝の世界に響き渡っている。

時刻はゆっくりと午前6時に向かっている。今日も穏やかな心で自分の取り組みを前にゆっくりと進めていこう。とにかく、自分の取り組みに従事する際には、意識状態を整え、穏やかさと同時に、高い集中力を持つことを大切にしたい。

精神的エネルギーを一点に集めるかのようなイメージで、自分のライフワークの一つ一つに打ち込んでいこう。そしてそれは、1人静かに行っていくことも大切にしたい。それは陰徳を積んでいく行為なのだ。自分のライフワークは、必ずどこかで絶えず他者や社会とつながっていて、自分が形をこの世界に生み出すということは徳を積む行為でもあるのだ。

1人知れず自分のライフワークに励み、陰徳を積んでいく。いや、陰徳を積むというような主体的な意識さえ手放し、結果として陰徳が積まれていたという形でそれは進行していくだろう。

昨日、少し時間を取って読書をしていた。昨日読み返していたのは、鈴木大拙の『禅』だった。その中で、哲学者のシモーヌ·ヴェイユはかつて、「力とは人を物に変えてしまう」ということを述べていたという記述に出会った。その直後の文章に鈴木大拙は、「愛とは物を人に変える」と述べていた。どちらの言葉も自分に響くものがあった。

前者に関して言えば、それはまさに現代で進行している病理的な現象の根幹にあるようなものかと思われる。現代は残念ながら、依然として力の時代なのだ。そうした時代特性から、人のみならず、ありとあらゆるものが物質化され、管理され、消費される対象に成り果てている。その背後には、不毛な対立や競争を生み出す「力」があるように思える。こうした力の時代からの大きな方向転換が突きつけられているのが昨今の現状ではないだろうか。ここからは、「力」によって失われてしまったものを取り戻すために、真正な愛に基づく諸々の試みが必要になるのかもしれない。

「力」は不毛な対立や競争を生むが、「愛」は創造を司り、それは生命を育んでいく。この現代社会が愛の時代に向かっていくための陰徳を積んでいこう。自分なりに何ができるのかは少しずつ見えてきているし、日々それらに従事している。

昨日ふと、再度ここから毎日、1日に意識的に少し時間を取って読書をしていこうと思った。ここしばらくは書物を積極的に読むことをしておらず、あえて書物から離れて、言葉を媒介させない活動に重点を置いていた。断食が終わりに差し掛かる際に、身体が自然と食べ物を欲するようになるのと同じく、今の私は、再び自ずから書物からの栄養が必要になってきているようだ。毎日惰性や義務感で書物を読むのではなく、書物を読みたいという思いが自ずから静かに芽生えてきたことを大切にし、ここからまた読書を日常に取り入れていこうと思う。フローニンゲン:2020/6/17(水)06:10

5911. 今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前6時半に向かっている。今朝は風がほとんどなく、とても穏やかだ。今この瞬間は、うっすらとした雲が空を覆っているが、天気予報を見る限りだと、間も無く雲が晴れ、朝日が地上を照らすであろう。内側の平穏さと光。それを絶えず持って生きる毎日。

早朝の創作活動に入る前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、小さなビルの会議室の中にいた。いや、そこはひょっとすると、一軒家の一室だったかもしれない。その部屋

は広く、机がいくつも置かれていた。部屋の中には若い男性が何人もいて、机にかじりついていた。どうやらそこではセンター試験か何かの模擬試験が行われているようだった。私もその模擬試験を受ける者だった。そこに集まっていたのは、全国の数十万人の受験者のうち、トップ数十人ぐらいの成績を収める人たちばかりだった。一方私の成績はそこそこであり、どうして自分がそこにいるのかわからなかった。

制限時間が60分ほどの数学の試験を、わずか15分ほどで問題を解き切り、満点を取っている男性がいた。それ以外の人たちも、制限時間一杯に時間を使うことをせず、速やかに問題を解き切り、それでいて高得点を叩き出していた。全ての科目が終わり、その場で合計得点が知らされたのだが、やはりその場にいた人たちの合計得点は驚くほどに高かった。

次の夢の場面では、知人のある女性に焦点が当てられていた。その方は、若い頃に砂浜で太陽の光を浴び過ぎてしまったらしく、歳を重ねてから、肌のトラブルが目立ち始めたとのことだった。後々に肌のトラブルを避けるために、太陽の光に長く晒される時には、日焼け止めを必ず塗るようにということを波打ち際で寝転びながら述べていた。

最後の夢の場面では、私は不思議な空間にいた。そこは数回建てのマンションのようでもあり、ビルのようでもあり、同時にデパートのようでもあり、さらには遊園地のようでもあった。それらが全て混ざっているような建物の中に私はいた。どこかの階が書店になっていて、そこに立ち寄ると、日本語の書籍だけではなく、外国語の書籍が随分売られていた。店の入り口付近に、目立った形で平積みされている書籍があった。それは日独の両言語で出版されている書籍らしく、双方の言語で書かれた書籍が隣同士に積まれていた。右側が日本語の書籍で、左側がドイツ語の書籍だったように思う。

その書籍は一種の自己啓発書なのだが、そのドイツ語版の方が、ある国のトップビジネススクールで必読文献になっているらしかった。試しに手にとって中を眺めてみると、そこには文字がほとんど書かれておらず、絵本のように思えた。大人が読んでも得ることのある何か教育的な絵本なのかと思ったが、どうもそうではないように思えた。そこで私は本を元の場所に戻した。すると、私の体はいつの間にかエレベーターの中にあって、9階の自宅に戻ろうとしていた。すると、途中階でちょくちょ

くエレベーターが止まり、人が乗ってきた。しかもみんな一様に、エレベーターが閉まる直前に慌てて乗り込んできたから不思議である。中には、エレベーターの扉に挟まりそうになる人もいた。

ちょうど8階はスーパーが入っているらしく、そこでは人が多く乗ってきた。いざ自分の目的階が近づいてきたと思ったところで、私は同じ建物内の別の場所に移動していた。目の前には、実家で飼っている愛犬に似た犬がいて、その犬の背中には鎖のようなものが埋め込まれていた。その姿は少し残酷に思えたのだが、どうやら誰かがボウガンのようなものを犬の背中に向けて発射し、そうすることによって、犬の身体に鎖を埋め込んだようだった。幸いにも、その犬の命に別状はなく、単にそれは犬が逃げないようにするための工夫のようだった。とは言え、私は目の前の犬が本来享受するべき何の制約もない自由について思うと、少し胸が痛んだ。

私はその犬の体を優しく撫でて、愛情を注いでいた。すると、その犬は嬉しそうに尻尾を振りながら、私の顔を舐め回した。その犬と戯れていると、私の横に、小中高時代の友人(TK)が現れた。彼が今から自宅に招待してくれるとのことであり、彼の家に行くことになった。

彼の家もまた不思議な作りをしていて、部屋のある階に向かう直前に、ジェットコースターのような乗り物に乗る必要があった。ちょうど目の前にその乗り物があったので、それに乗り、スタートを知らせるバーが上に上がり、乗り物がゆっくりと動き始めた。乗り物が向かう先には居住空間と宇宙空間の双方が混じったような空間が広がっていて、そこには見知らぬ大人たちが種々のゲームを楽しんでいる世界があった。今朝方はその他にも夢を見ていたように思う。

鎖の埋め込まれた犬や、友人の自宅に向かう際の不思議な空間がとても印象的だ。とりわけ最後の夢の場面として描かれていた空間は、現代人の全ての人たちが、何か気づかない形でゲームをしているようなことを暗示しているようにも思えた。フローニンゲン:2020/6/17(水)06:45

5912. フローニンゲンの画集専門店にて

時刻は午後7時半を迎えた。この時間帯はまだまだ明るく、日が沈むまであと2時間半ぐらいある。いつも就寝準備を始める午後の9時半はまだ明るく、随分と日が伸びたものだと実感する毎日だ。

今日は街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に出かけ、途中でふとある店で足を止めた。そこは、以前から気になっていた画集専門店である。そこには画集だけが置かれているわけではなく、小物や絵画作品も少々置かれている。コロナの期間中、店が閉まっていて、外から店の中を眺めていると、また店が開いたら足を運びたいと思っていた。今日の午後に店を訪れた時、通りに面した店の前に、割引セールされている中古の画集がカゴに大量に入って売られていた。まず私は、店に入る前に、それらの画集を手に取って眺めた。

アテネ旅行を9月の中旬に変更したことに伴って、この夏はオランダにあるピエト･モンドリアンの美術館に足を運ぼうと考えていることについて昨日の日記で書き留めていたように思う。すると偶然なことに、割引セールされている画集の中に、一冊だけピエト･モンドリアンのものがあった。そこに、モンドリアンとの縁を感じた。画集の中の作品の大半が、カラーではなく、白黒で印刷されていることもあって、その画集を購入することはしなかったが、モンドリアンに導いた何かがやはりあるのだろうと思われた。

昨年は、レンブラントの没後350周年とのことであり、そのタイミングで、アムステルダム市内のレンブラントの美術館に改めて足を運ぼうと思っていたが、結局そこにもまだ行けずじまいであり、そこへ行くリマインダーも兼ねてレンブラントの画集を購入した。中身の言語がオランダ語のため、解説を読み解くことは難しいが、絵だけ眺めようと思ってそれを購入することにした。

今日のオランダは天気が良かったこともあり、カフェやレストランのテラス席では昼間からアルコールを飲む人たちで賑わっていた。この国で生活をしていると、平日と休日の境目が本当に薄く感じられる。運河沿いや公園には、日光浴を楽しむ人がいて、赤レンガの家々の外に椅子を出して、そこで本を読む人たちの姿もよく見かけた。また、運河沿いでは、オランダ名物とも言えるマリファナを楽しげに吸っている人たちもいて、その匂いは鼻につく嫌な匂いなのだが、彼らを含め、街全体が長閑な雰囲気を発していた。

今日は午前中に、ある協働者の方とオンラインミーティングをした。来月、その方とオンライン対談をすることになっていて、今日はその打ち合わせだった。その方との出会いも含め、ここ最近は本当に、自己を取り巻く素晴らしい関係性と良縁に感謝の念を持つ。取り巻く人間関係と良縁が、自分の人生を絶えず支えてくれていて、そして人生を未知なる場所に運んで行ってくれる。そのようなこ

とを改めて実感し、今夜はそのことにいつも以上に深い感謝を捧げて就寝しようと思う。毎晩そのような感謝の念を持って1日を締め括っていきたい。フローニンゲン：2020/6/17（水）19:46

5913.「自然法爾」の在り方と今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。今朝はうっすらとした雲が空を覆っている。天気予報を確認すると、昼前から雨が降るそうだ。そこからはもう一日中雨となるようであり、雨が止むのは就寝してからになるとのことだ。雨の前の穏やかな雰囲気。今、それを味わっている。

昨日は、自ら（みずから）というよりも、自ずから（おのずから）という精神を持つこと、ないしはそうしたあり方について考えていた。ここ最近の私は、後者のような在り方を通じて日々を生きている。

仏教用語の中に、「自然法爾（じねんほうに）」という言葉があり、まさにこの言葉を体現する形で毎日を送っているように思う。自己のはからいを捨てて、あるやなしやの自己を捧げ、全てをありのままに受け止めながら生きるような日々。自己探求においても、自ら問いを立てるというのではなく、自ずから問いが立ち現れるのを待つ自分がいる。そして、ひとたびそうした問いが自ずから立ち現れたら、その問いにそっと耳を傾ける自己が現れる。

ここでも自己が問いに耳を傾けるという主体的な在り方というよりも、ある問いが立ち現れたことによって生み出された関係性の中で自己が立ち現れ、その自己が問いに自ずから接近していくというようなイメージである。これは問題解決においてもそうであり、何か問題が生じたときに、その問題を解決しようという意思的･作為的な関与をするのではなく、問題が自ずから氷解していくような関与が自ずからなされるというような在り方を自分はしているようだ。さらには、創作活動においても、この「自ずから性」ないしは「自然法爾」の在り方を大切にしている。

今日もそうした在り方で創作活動と共にいよう。創作活動に励むというよりも、まさに一緒にその瞬間にいるという感覚なのだ。

今朝方は、幾ばくかの感動を引き起こす夢を見ていた。だが残念ながら、そうした夢の場面を思い出すことができない。代わりに覚えている場面がいくつかある。夢の中で私は、日本の田舎のキャン

プ場にいた。厳密には、キャンプ場のすぐそばまでやってきていて、そこから歩いてキャンプ場に向かっていた。

キャンプ場に到着すると、何か小さな事件があったらしかった。そこには警察はおらず、その代わり、小中学校時代の友人が何人かいた。男女合わせて6人ぐらいだろうか。彼らに事情を聞くと、誰かが盗みを働き、キャンプ場から逃走したらしかった。昨日は雨だったため、犯人の足跡らしきものが地面に残っていた。

私はその足跡を見て、そして実際にそれを触ってみたところ、足跡がまだ新しいものだとわかったのである。私はふと、「足跡の様子と触った感触からすると、犯人が逃亡してまだ14時間以内だ」ということを述べた。私の観察眼に友人たちは驚いていたようだったが、とにかく早く犯人を追いかけようということになった。そこで夢の場面が変わった。

その他にもいくつか夢を見ていた。覚えている場面としては、小中高時代の女性友達(IN)が、名前の長い変な新興宗教に入信していることがわかり、彼女と距離を取るようにし始めたことだ。信仰の自由があるため、別に差別をしているわけではないのだが、彼女と適切な距離を取ることがお互いのためかと思われたのでそのようにした。そうした場面があった。フローニンゲン:2020/6/18(木)07:05

5914. 本日の振り返り

時刻は午後7時を迎えようとしている。今日はいつもより少し早く夕食を摂り終えた。今日は午後に雨がぱらついていたが、天気予報で伝えられていたよりもその雨量は少なかった。明日も少し天気が崩れるようだが、今週末からは天気の良い日が続くようなので何よりである。

今日も自分の内側に惹起される創作衝動に基づいて創作活動に没頭していた。自己が創作活動に沈潜していき、創造の泉に触れるかのような感覚がある。

今日は創作活動以外にも、「一瞬一生の会」の音声ファイルを作ったり、この秋の講演会に向けた準備をしていた。後者に関しては、ここからゆっくりと色々な参考文献を調べていき、ゆっくりと当日

の資料を作っていきたい。今回の講演会の主題は、これまで真正面から扱ったことはほとんどなかったので、資料の作成も含めて非常に楽しみである。資料の作成の一環として、今夜はルドルフ・オットーの『聖なるもの』を読み返そう。再読が1/4ほど進んでおり、今夜はその続きを読み進めていく。

夕方のフローニンゲンの街に吹くそよ風はとても優しい。その優しさに応えるかのように、新緑の木々の葉が揺れている。

それでは今から、曲の原型モデルをいくつか作りたい。夕食前に、スクリャービンに範を求めていくつか原型モデルを作った。今から、ブラームスとシューベルトに範を求めてさらにいくつか原型モデルを作っていこう。それが終われば、上記の読書に取り掛かり、今日も早めに就寝準備を始める。早いもので、明日はもう金曜日だ。明日もまた、陰徳を積む充実した1日になるだろう。フローニンゲン：2020/6/18（木）19:05

5915. 親族の葬式に関する夢

時刻は午前6時を迎えた。今この瞬間は風もなく、とても穏やかな朝の世界が広がっている。数羽のカモメたちが、清々しい空を力強く飛び立っていった。

今日は午後から少々雨が降るようだが、雨が降る時間は長くないようだ。また、明日からは軒並み天気が良い日が続く。気温も少しずつ高くなっているのを実感し、フローニンゲンもようやく夏に入る様子だ。

今朝方は印象に残る夢を見ていた。早速夢を書き留めておきたい。夢の中で私は、親族の葬式に参加することになっていた。葬式の前日に早めに就寝したところ、就寝直後に誰かから電話がかかってきた。「こんな夜中に誰だ？」と思っていたところ、親友（FK）のお母さんだった。電話を取ると、私のそばにいた両親たちが話し声を上げ始めたので、親友のお母さんの声が聞き取りにくかった。私は寝起きでもあったので、あまり機嫌が良くなく、両親に静かにするように強く述べた。それでも2人の喋り声は収まらず、結局親友のお母さんがなんと言っているのかほとんどわからなかったので、挨拶もそこそこに電話を切ることにした。

そこでふと父を見ると、葬式用に正装していて、今から葬式会場に向かうようだった。「この時間から会場に行くのはあまりにも早いのではないか？」と思ったが、時計を確認すると、もう朝になっていた。私は就寝してすぐに電話がかかってきたと思っていたのだが、どうやら数時間経ってから電話があったらしかった。そうしたこともあり、二度寝する必要は全くないと思い、私もそこから起き出して、葬式に出かけていくための支度を始めた。

父が先に出発するとのことであり、あとはソックスを履けば準備は完了のようだった。そこで父は、ソファーに並べられた私の靴下を見て、1つ譲ってくれないかと述べた。私は随分とソックスを持っていたので、快諾をした。父はいくつかのソックスの中から、黒いソックスを選んだ。

父が家を出発してしばらくしてから、私も会場に向けて出発した。会場に到着すると、そこは実際に私が通っていた小学校だった。その小学校は、瀬戸内海に面していて、校舎からは穏やかな瀬戸内海を眺めることができる。会場の待合室にまずは向かい、そこに到着すると、親族を含め、葬式の参列者が随分といた。

私が到着してすぐに、知り合いの女性陣たちが続々と姿を現した。全員同じ格好をしていて、変わった衣装を身に纏っていた。それは絹でできた何かだった。待合室に到着した彼女たちに一言だけ挨拶をして、私は再び受付に戻った。するとそこで、小中高時代の友人（TK）に出会った。彼も葬式に来てくれたようなのだが、以前と風貌がガラリと変わっていた。端的には、やたらとヤンキー風になっていたのである。どうしたのかと尋ねてみたところ、本人は変わったという自覚がそれほどないようだったが、気分転換に少し雰囲気を変えてみたということを述べていた。そこから彼の近況を伺ってみると、何やらちょうど昨日、ある製造会社から嫌がらせの連絡を受けたとのことだった。その会社から脅迫状のようなチラシが郵便受けに入っていたそうだった。

脅迫内容について尋ねてみると、何やら、無数の植木鉢を自宅に送るというものだったらしい。「なんだその脅迫は？」と私は思ったが、確かにそれはそれで不気味なことだと思った。彼はその会社から連絡がないように、携帯電話の電源を絶えず切っているということも教えてくれた。

もうそろそろ葬式の始まる時間になったところで、日本を代表するあるEコマースの会社の社長秘書が私のところにやってきた。その会社の社長が葬式後の昼食の際に、私に会って話をしたいとのこ

とだった。いや厳密には、もうすでに昼食の予約をしているので、後ほどはよろしくお願いしますということを言われたのである。私はそんな話は聞いておらず、こちらの予定も考慮すせずに会食をセッティングされたことに対して、私はあまり良い気分ではなかった。私は、とにかく会食の類は常に断るようにしているし、突然の誘いは自分の生活リズムを壊すためにそれも常に断るようにしている。

私はその社長と会って話をするのが嫌だったわけではないのだが、突然勝手に予定を組まれたことが不快な感情を引き起こしていた。またその秘書は、明日、広島のプロサッカーチームが協賛する少年サッカー大会の開会式で挨拶を私がすることになっていると述べた。それもまた聞いていない話であり、大会を観戦はしたいと思ったが、挨拶を任されるというのは気乗りしなかった。会食も開会式の挨拶もどちらも断ろうとしたが、それらは決定事項のようだったので、無断で欠席しようと思った。

そんなやり取りを秘書としていたので、これから始まる葬式に参加する気分にもなれず、私は会場を後にして、自宅に戻ることにした。海沿いの道はとても穏やかであり、人っ子ひとりいなくてとても静かであった。しばらく歩くと、そこでふと、やはり葬式ぐらいは参加してもいいかという気持ちになり、葬式会場に引き返すことにし、再び会場に戻った。フローニンゲン：2020/6/19（金）06:30

5916. 真夏のアテネに向けて

時刻は午後7時半を迎えた。今、夕日が西の空に輝いている。今日は午後に買い物に出かけた際の帰り道に、ふと北欧の湖畔の森の中での生活を想った。虫の鳴き声や鳥の鳴き声が心の中に響いてきて、とても静かな気持ちになり、なんとも言えない幸福感に浸っていた。

フローニンゲンでの今の生活も十分に静けさと平穏さがあるのだが、もっと深い静けさと平穏さを求めて、自然の中で生活することを夢想する自分がいる。それはきっといつか実現するに違いない。そんな予感がある。

買い物からの帰り道、この夏の旅行について再度考えを巡らせていた。7月と8月の2回に分けて、オランダ国内に2箇所あるピエト･モンドリアンの美術館に行こうと思った。そのような思いが芽生えた瞬間に、昨夜ふと、ひょっとしたら先日キャンセルになったフライトは行きか帰りのどちらかだけの可

能性があるのではないかと思ったことを思い出したのである。キャンセルの連絡を受けたメールをぼんやりと眺めていた時の残像が脳裏にあり、その可能性を考えたのである。

本日の夕方にギリシャ航空に連絡をしたところ、まさにその通りであった。端的には、帰りのフライトだけキャンセルになっていた。私は今回の電話の際に、9月中旬に旅を伸ばしてもらおうと思っていたのだが、帰りのフライトだけがキャンセルになったことを受けて、急遽帰りのフライトを変更してもらった。最終滞在日の前日のフライトがあるとのことだったが、それは朝早くの便であったため、それは選択肢から外した。

昼の便で近くの日はないかとオペレーターの方に尋ねてみたところ、その3日後に昼の便があった。当初私は、5泊6日の旅を考えていたのだが、前回の旅から半年経ち、ここまで旅ができなかった分、アテネの滞在日数を伸ばそうと思った。せっかくなので、アテネをゆっくりと満喫しようと思ったのである。結局、8泊9日の旅となり、予想以上に長いものとなった。それだけの滞在日数があれば、アテネはくまなく回れるだろうし、アテネ以外の街にも足を運ぶことができそうだ。

最初私は、予想よりも長く滞在することになり、帰りのフライトを確保することに少し躊躇したが、せっかくなのでアテネを満喫することにして、オペーレーターの方に興奮気味にフライトの確定をお願いした。すると、オペーレーターの女性は笑いながらそれに応じてくれた。

7月末のアテネはとても暑いだろうが、フローニンゲンでは味わえない本格的な夏らしさをアテネで楽しみたいと思う。モンドリアン美術館に行くのは8月と9月にしようと思う。それは、秋の日本への一時帰国との間の日帰り旅行としてちょうど良いものになるだろう。フローニンゲン：2020/6/19（金）19:54

5917. アテネ旅行と秋の講演会に向けて

時刻は午前5時半を迎えた。今朝は午前4時半に起床し、大変良い目覚めだった。目覚めた時には、もうすでに小鳥たちが鳴き声を上げていて、辺りは薄明るくなっていた。5時半を迎えた今はもうすっかり明るい。雀だけではなく、鳩がポッポーと鳴き声を上げている。

昨日は、無事にアテネ旅行のフライトの予約変更を行った。数日前にアテネ航空から連絡があった時に、またしてもフライトがキャンセルになったのかと、少々残念に思ったが、キャンセルされたのは行きと帰りの両方のフライトではなく、帰りのフライトだけだった。そうしたこともあり、昨日は帰りのフライトを再度予約し、当初よりも3日長くアテネに滞在することになった。

今回久しぶりに旅行をし、せっかくアテネに行くのだから、長く滞在し、アテネをゆっくりと満喫するのもいいだろうと思った。滞在延長に伴い、最終日の前日にある協働プロジェクト関係のオンラインミーティングは、アテネのホテルから参加することになりそうだ。

出発まであと1ヶ月ほどであり、日が近づいてきたら、具体的にどこを巡るかの詳細を詰めていこう。滞在中は、朝はホテルでゆっくりし、昼近くになってから観光に出かけ、博物館や美術館を巡るのであれば、1日に1箇所に足を運ぶことにとどめよう。仮に古代遺跡などに行くのであれば、数箇所めぐってもいいかもしれない。いずれにせよ、今回もいつもと同じように、ゆったりとした旅にする。旅から得られるものとゆっくりと向き合い、ゆっくりとそれを咀嚼していくためである。

昨日は、秋の講演会に向けて会場を探していた。なかなか良い会場が見つかったので、それを協働者の方に伝えた。先ほど改めて調べてみたところ、やはりその場所がアクセスを含めて何かと良さそうであった。セミナールームの大きさなどを含め、昨日調べた時に見落としていた部屋があったので、今夜それについて協働者の方に連絡をしておこうと思う。

今日は午後に時間を取って、講演会に向けた資料を作成していく。いくつか参考文献が手元にあり、それらをもとに資料を楽しみながら作っていきたい。今回の講演会で扱うテーマは今までにないものなので、自分自身もそのテーマについての理解を深めることが楽しみである。

講演会までちょうど4ヶ月あるので、今からゆっくりと資料を作っていこう。まずは大枠を決めて、あとはゆっくりと肉付けをしていく。当日に向けた資料を作成すること、そして当日の講演会そのものが創造的な活動であることに気づく。アテネ旅行のみならず、今年の秋の一時帰国もとても楽しみだ。フローニンゲン：2020/6/20（土）05:59

5918. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今、朝日が昇り始め、赤レンガの家々の屋根を照らし始めた。今朝は風がなく、新緑の葉が静かにそこに佇んでいる。その様子を眺めている自分の心も同様に、今この瞬間に静かに佇んでいる。静かな佇みの呼応がここにある。

絶えず静けさの中にあって、絶えず静けさであること。自分はそのようにしてここにある。存在の最奥にある静けさが自ずから感じられてきて、自己はそれそのものに他ならないことがわかる。

幸いにも、今日からは天気の良い日が続くようだ。フローニンゲンもいよいよ夏らしくなってきて、来週末には30度近くまで気温が上がる日が続く。来月末に訪れるアテネを調べてみると、アテネはもう随分と暑いようだ。力強さを感じさせてくれる夏がやってきた。今年の秋の一時帰国に向けて、夏はまた固有のエネルギーを蓄える時期としたい。

今朝方の夢。夢の中で私は、見慣れないサッカーグラウンドのゴール裏にいた。グラウンド上では試合が行われていて、どうやらこれからPK戦が行われるようだった。最初のキッカーがボールを所定の場所に置くと、彼は私の高校時代の友人であることがわかった。ボールを蹴る前には集中する必要があると思ったので、その時には声をかけず、彼がボールを蹴り終えてから声をかけようと思った。彼は真剣な顔をしており、一度呼吸を整えてから助走に入った。そしてボールを蹴り、それは見事にゴールに入った。その瞬間、私は喜びの声を上げ、同時に彼の名前を呼んだ。すると彼は笑顔で私に向かって手を上げた。

次のキッカーは誰かと思っていたところ、これまた高校時代の友人が姿を現した。だが彼はそこにボールを置きに来ただけであって、実際にはその前に蹴った彼と同じチームに属しているようだった。次のキッカーは見知らぬ人であり、彼もまたゴールを決めた。

そこで突然場面が変わり、私は小中高時代の親友(SI)とセミナールームのような部屋でサッカーのフォーメーションについて話をしていた。その場には30名ほどの人がいて、友人がフォーメーションについて述べる意見にみんな耳を傾けていた。彼は私に専門的な観点から解説をしてほしいと述べたので、私は複雑性科学の観点からフォーメーションについて解説をした。私はそこでかなり饒

舌にあれこれと喋り、相当に情報量の多い解説をした。その場にいた人たちがついて来れているか一瞬懸念したが、せっかくなので最後まで喋っておこうと思い、引き続き解説を続けた。そのような場面があった。

その他にも、現在開催している「一瞬一生の会」のある受講生が夢の中に出てきた。その方は、今のところの会の評価を5段階中4とし、そのような評価をした理由について私に教えてくれた。フィードバックは的を射たものであり、夢の中の私はこれからの会に活かしていこうと思った。フローニンゲン:2020/6/20(土)06:20

5919. 本日の振り返り:成長の方向性

時刻は午後7時半を迎えた。今、静かに土曜日が終わりに近づいている。今日も気がつけばあっという間にこの時間帯になっている。今朝は午前4時半に起床し、そこから午前中は創作活動に没頭し、合わせて今年の秋に行われる講演会に向けての資料作りに時間を充てていた。この資料作りそのものも1つの創作活動であり、そのプロセスは実に充実したものである。

そのような形で午前中を過ごしていると、あっという間に昼がやってきた。昼にバナナと4種類の麦のフレークを食べ、その後しばらくして仮眠を取るというのがいつもの流れであり、仮眠後からの時間の流れはさらに早く感じられる。いつも気がつけば夕方の時間になっているという感じなのだ。今日はここからまた少し読書をしていきたい。

昨日、成長·発達における方向づけの問題について考えていた。花は種から花という方向に向かって成長を遂げていく。だが、石ころにはそれができない。人間の成長プロセスは前者と似ている。生命にはやはり何かしらの成長の方向性があるのだろうか。そして、方向性のみならず、そこに向かわせる方向づけの諸力があるのかもしれない。そのようなことをぼんやりと考えていた。

そう言えば、今日は創作活動や講演会に向けた資料作り以外にも、午後に時間を取って音声ファイルの作成をしていた。「一瞬一生の会」の補助教材として、音声ファイルを随分と作成していたことを思い出した。ここ最近は、音や絵を通じて内的感覚を表現するだけではなく、日記に加えて自分の声を通じてもそれを行っている。様々な実践方法を通じて、自分の内側にあるものを外側に形にするということは共通している。

明日もまた音声ファイルをいくつか作っていこうと思っている。一日中何かしらの創作行為に従事することによって、明日もまた充実感と共に時間が過ぎていくだろう。フローニンゲン：2020/6/20（土）19:43

5920. 真善美と今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前6時に近づいている。今、燦然と輝く朝日が赤レンガの家々の屋根に照り始めている。遠方から、小鳥たちの鳴き声が響き渡ってくる。空には雲ひとつなく、澄み渡るような日曜日の朝の世界が目の前にある。今日もまた、落ち着いた心と集中力を持って自分の取り組みに従事していこう。

昨夜ふと、真善美について考えていた。それら3つの領域は他に還元することはできず、本来はそれら3つの領域に優劣はない。しかし、カントやボールドウィンが美を司る領域を最上のものにしていたことを考えてみたときに、その理由らしきものがなんとなく体感的に浮かんできた。

真や善の判断には言語的な文節作用が働くが、真正の美的判断だけが言語の文節化機能を超える。この言葉にならないという性質を持ってして、美の領域が最上のものとして扱われている可能性があるということをぼんやりと考えていた。

このところは、言葉と言葉にならないものについて考えることが多い。ふとしたときにそうしたことを考えている自分がいる。それは日々の活動が言葉を基にした活動と、言葉にならない音や絵を基にした活動に満たされているからなのかもしれない。

昨日と同様に、今朝方も印象に残る夢を見ていた。最初の夢は、喜びの感情をもたらすものだった。夢の中で私は、小中学校時代を過ごした社宅の公園にいた。そこには何人かの人がいて、その中に以前から気になっている人がいた。その方は公園の真ん中で天に向かって何かを祈っているようだった。目を閉じて、手を合わせながら祈る姿には美しさがあった。

その方の話をもっと聞いてみたいと思った私は、自分の誕生日の日の昼にランチをご一緒できないかと伺ってみた。するとその方は微笑み、即座に快諾をしてくれた。快諾をもらい、純粋に嬉しさの

感情が自分の内側から湧いてきた。しばらく私はその感情に浸っていて、我を忘れているようだった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の中で私は、実際に通っていた中学校の体育館の中にいた。そこではフットサルが行われていて、私もフットサルを楽しんでいた。メンバーとしては、元日本代表のあるプロサッカーチームの監督を務める方と、私の友人の何人かがそこにいた。しばらくフットサルをしていると、今度はバスケをしようという話になった。

すると、ちょうど身長の高い韓国人の人たちが何人か体育館にやってきて、一緒にバスケをしようということになった。もっとも背の高い韓国人の2人は別々のチームになり、あとはお互いの力が拮抗するようになんとなく別れた。

最後の夢の場面では、小中学校時代のある女性友達が、就職活動において差別を受けたという話を私にしてくれていた。するとその場に、実際に差別をした会社の面接官の男性2人がやってきて、彼女とその場で和解の話をし始めた。相手側はとても冷静かつ穏やかに話を進めているのだが、私の友人の方は少し興奮気味であり、頭に血が上っているようだった。私は彼女を落ち着かせ、冷静に話し合いをするように促した。今朝方の夢はそのような内容だった。フローニンゲン：2020/6/21（日）06:15